

法然上人のご法語 第十七 易行往生いぎやうじう

念仏を申し候うことは、様々の義候えども、ただ六字を称うる中に、一切の行はおさまり候うなり。心には本願を頼み、口には名号を称え、手には念珠ねんじゆを取るばかりなり。常に心をかくるが、極めたる決定往生の業にて候うなり。

念仏の行は、もとより行住座臥、時処諸縁を嫌きらわず、身口の不浄を嫌わぬ行にて、易行往生と申し候うなり。

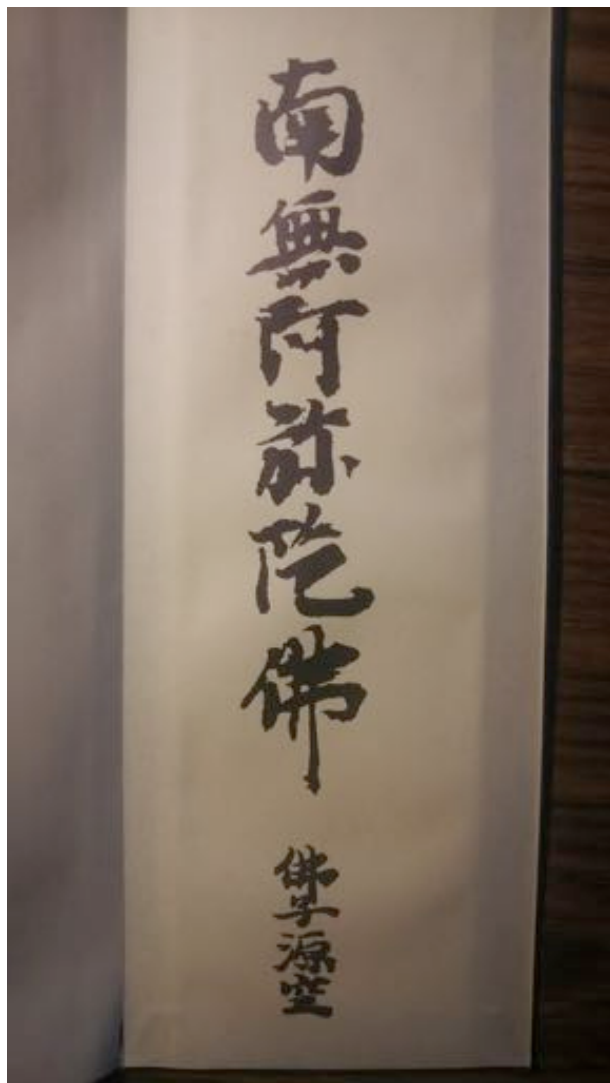
ただし、心を浄くして申すを、第一の行と申し候うなり。人をも左様に御勧め候うべし。ゆめゆめ此の御心は、いよいよ強くならせ給い候うべし。

「易行往生」

念仏という易しい行によって極樂に往生すること

「様々の義」

三心・四修（心がまえ、修行のしかた）などの教えや説明



法 然 上 人 筆

「ひとたびも 南無阿彌陀仏といふ人の  
蓮の上にのぼらぬはなし」  
(拾遺和歌集 卷二十)



空也上人 (平安時代中期、10世紀)